

哥仙貫之の古畫に

冠にも指をそふめり哥の汗
青流亡妻をいたみ

園女とはこれや此世を夏の海
上下と裸の間を夕すゞみ

ある御方より、あさがほ書たる
扇にさんせよさあり

舜や扇のほねを垣根哉

さ書て奉けるに、かされてまた
軍繪かいたる扇に、さん望ま
給ふ。再は申かれて、

涼風や與市をまねく女なし

鬼のやうなる法師みちのくへ、く
だるさて、道祖神にさがめられ、
異例して何がしの、さに介抱せら
れ、漸生のびて、心よはき文ごも

送られしかへしに、

辨慶も食養性や瓜晶
瓜守や桂の生洲たえてより

越前の人の土産をめで、光廣卿の
うたをおもひ合侍り。

鯉哉先まなばしを袖で拭

元角田川牛田さいふ所にて

いそのかみ清水也けり手前橋

湖舟、餞に酒たうべて

貫之の鮎のすしくふわかれ哉

はなんけの一句を扇に望れて、

生の松ばらのうたをよす。

木曾路とや涼しき味をしられたり

市原にて

虫はむと朽木の小町干れたり

手にとるも林檎は軸で面白し

百日のあたら戀しや洗ひ鯉

皿鉢に駒のけあげや心てん

乳のめば清水がもとの祭かな

七日

鉢にのる人のきほひも都哉

山玉の氏子として

我等迄天下祭や土ぐるま

番附をうるも祭のきほひ哉

松原に田舎祭や晝休み

夏瘦に能因しかも小食也

乞食哉天他を着たる夏衣

高閣挽涼

香藿散犬がねぶつて雲の峰

蝙蝠に宇治のさらしや一曇

蟹をもてなす人に

うき舟の涼しき中へかにの甲

ねてかどへ蓮にざそふ朝朗

大雨大風

吹降の合羽にそゞ御祓哉



10.10.19

昭和十年十月十日印刷
昭和十年十月十五日發行

俳人其角全集 第二卷
頒價 二圓

編纂者 勝 峯 晋 風

東京市本郷區金助町六十番地

發行者 遠 藤 滿

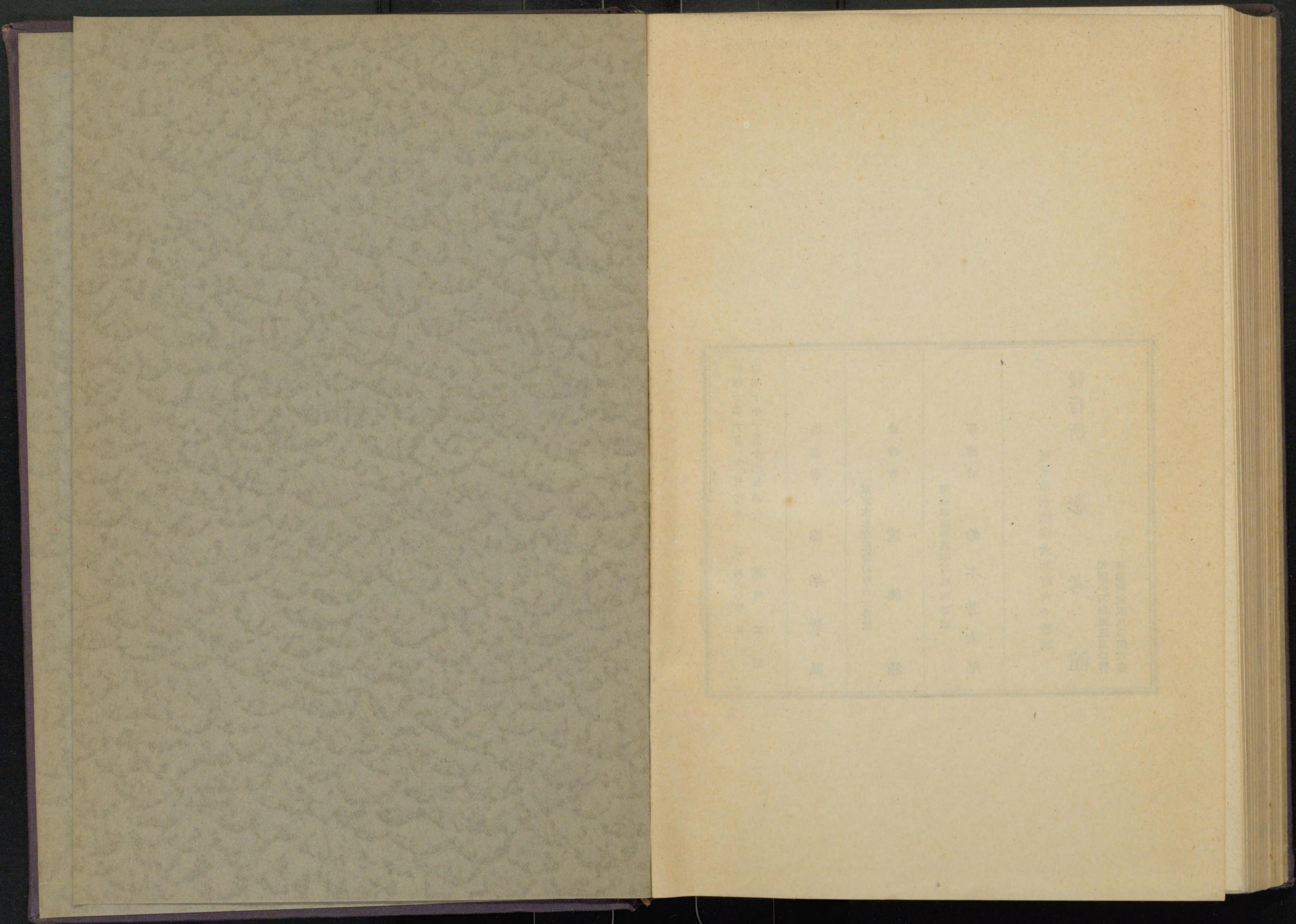
東京市四谷區本村町四番地

印刷者 鈴 木 芳 太 郎

東京市本郷區金助町六十番地

發行所 彰 考 館

電話小石川五三三〇番
振替東京五八〇四六番



686
74

